

本日の聖書箇所は72人の弟子たちがイエスのもとに帰って来て、その宣教活動の結果を報告しているところです。10章冒頭でイエスが72人の弟子たちに対して、御自分が行くつもりであった町や村に、2人を一組にして先に遣わされたとあります。その際に、『わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ』(3節)とあるように、その宣教活動が狼に襲われる小羊のような結果になることを予想して話していました。さらには、派遣されるとき身なりは『財布も袋も履物も持っていくな。途中でだれにも挨拶をするな。』(4節)と言っているように、十分な身支度をせずに行くことをイエスは命じています。

ところが、72人がイエスのもとに帰ってくると、『主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します』(17節)と得意げに報告して、イエスの名によって行う業が悪霊を屈服させる効果を持っていたことを喜んで報告したのでした。

それに対して、イエスは『悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい』(20節)と戒めたのです。このイエスの対応は興味深いものです。私たちが福音を信じて、福音を基盤として生きていく中で、現実生活の苦難や悲しみが解消されるというキリスト教信仰の効果を実感するのですが、そのことで満足してはならないと言われているような気がします。

1

イエスは神の国が近づいていることを宣べ伝えました。端的に言えば、それは神の国＝神の支配が現実世界の中に現れていることを見つけて出しなさいということでした。現実世界は差別や苦難に満ち溢れているけれども、既に神の愛に溢れた支配がいきわたっているのだということを見出して生きていくことを勧めたのでした。けれども、これは現実世界の矛盾を隠ぺいすることで、現実世界の不条理さから目をそらす生き方を推奨したものではありません。

神の支配が現実世界の中に実現しているのに、それを見出すことができないで、苦難や悲しみに押し潰されている状態から脱却して、神の支配に自分を委ねて生きていくならば、愛の意志の塊である神が祝福する人生が開けてくるというわけです。

けれども、私たちが今の日本の社会状況の中で目にしているのは、弱い立場の者がますます虐げられている姿ですし、原発村の利権に動かされて、原発の再稼働がすんなり決定されていく現実です。地震大国で、災害が起こりやすい日本列島なのに、福島第一原発の事故などなかったかのような政策決定がなされている政治状況です。

そして、現代社会は医療でも昔と比べるならば、格段に進歩した状況の中にありますし、おそらく昔ならば、精神的な病気も超自然的な領域のこととして、悪霊の仕業だと考えられていたに違いないと、現代の私たちは容易に想定することができています。そうい

う現代から見ると、イエスの名によって悪霊が屈服することもほほえましい出来事のように感じてしまうかもしれませんが、実は、本日の聖書箇所はキリスト教信仰によって神の支配に自分を委ねて生きていくことで、新しく生き直すことができた信仰者に新たな課題が浮かび上がってきた事態をどのように理解すべきかどうかという問題を提起しているのです。

キリスト教信仰によって、厳しい現実世界の中でも勇気をもって生きていくことができようになることを、神の愛の支配によって実現したこととして喜ぶ者がたくさん出現したのですが、イエス・キリストの名によって救われた恵みを、まるで自分の霊的な力で達成したかのように誤解してしまう者たちもたくさん出現したのです。おそらく、イエス・キリストの名によって生きることによって自分が霊的な力を得たかのように勘違いして、自らの信仰の力を他者に対して誇るような信仰者が現れたのです。それが『主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します』（17節）という言葉で表されているのです。

ですから、そういう霊的な力を誇る者に対して、イエスは『わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし、悪霊があなたがたに服従するからと言って、喜んではならない』（18〜19節）と言ったのです。

この世のあらゆる苦難や悲しみに打ち勝つ権威を授けたので、信仰者に害を加える者は何一つなくなりました。そのことを悪霊が服従するようになったこととして単純に喜んではならない。悪霊という不幸や苦難をもたらすものを退けたとしても、それがイコール神の支配の中に自分が組み入れられたことにはならない。確かに、キリスト教信仰によって苦難や悲しみに右往左往することがなくなりました。喜ばしいことだが、その所に安住して満足してしまうと、信仰者である自分が、神の支配をこの世に実現させていくための器の一つであることが忘れ去られてしまうのです。

私たち信仰者にとって、自分が救われたことを証しすることは大切です。でも、救われた者として、神の愛の支配がこの世に実現していくために自分の力を注力することも求められているのです。そのことが21節以下に具体的に示されているのです。イエスが聖霊によって喜びにあふれて言います。『天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。』（21節）と言って、「これらのこと」というのは、神の支配の業に参加していくことを自分が知恵ある者とか賢い者と考えている信仰者には隠したのに対して、幼子のように神の支配を受け入れている者には、明らかに示されるといいます。

幼子のように神の支配を受け入れる者というのは、具体的には25節以下で展開されている「善いサマリア人」の譬えが示しているように、神への愛を実行する人は偶然に出会った人を躊躇なく助けるサマリア人のように隣人への愛を実践する人物だということです。神への愛を実践する者が、神の愛の支配に救われた者として参加するのです。このように神の支配に参加していくことを、救われた者の恵みの証しとして実践していくならば、それこそが教会の使信として、この世にキリストの福音を告げ知らせいく者となるのです。